

二分脊椎女性の月経と性の健康に関する研究 —医療従事者のアンケート調査から—

小野敏子¹⁾ 笠井由美子¹⁾ 野田洋子²⁾ 足立久子²⁾

要 旨

二分脊椎女性が障害を持ちながらも月経を女性の特質にとらえ、健康な性を発達させていくために医療に関わる者としてどのような支援が必要かを検討する基礎資料を得ることを目的に医療従事者へのアンケートを実施した。研究方法：郵送法による質問調査、対象は二分脊椎研究会会員 269 名であった。調査項目は①月経に関する相談、教育・支援の経験と内容、②性に関する相談、教育・支援の経験とその内容、③月経や性の健康教育に関する考えなどであった。結果：対象者は医師が 9 割で他看護師、PT/OT であった。男女比は男性が 8 割、経験年数は平均 17 年であった。月経や性の健康に関する相談・支援の経験は約 20%前後と少なかったが教育・支援の必要性の認識は高かった。しかし、教育・支援をするための具体的方略についての知識や情報が少ないことが明らかになった。また、今後の課題としては専門的知識をもった医療従事者の継続的関わりの必要性が示唆された。

キーワード：二分脊椎女性、月経、性、医療従事者

I. はじめに

二分脊椎症は、先天性の神経形成不全による神経系の機能障害と脊椎正中線上の骨形成不全による脊椎変形などによって、知的機能障害、運動機能障害、膀胱直腸機能障害など多様な症状を示す¹⁾。

近年、生命予後が改善し、生活面の向上も図られるようになってきた。また二分脊椎女性は、性交が可能で性周期があれば妊娠は可能であり、生殖機能に問題がなければ妊娠・出産する女性もいる^{2)~5)}。

しかし一般的に月経やセクシュアリティについては今まであまり問題とされず、そのことが二分脊椎女性の悩みを深くしている。また幼少期から排泄障害を持ちながら成長する二分脊椎児は、自己の性を否定的に捉えやすく、自己肯定感への影響も考えられる。そこで、われわれは思春期から性成熟期にある二分脊椎女性の月経と性の健康についての身体的、心理・社会的側面から包括的教育プログラムを作成し、実践する必要があると考えた。

二分脊椎女性の月経と性の健康に関しては国内であまり研究がされていない現状がある。

二分脊椎女性が障害をもちながらも、月経を女性の特質にとらえ、健康な性を発達させていくことは、二分脊椎女性の将来において大切と考える。そこで、医療に携わる者としてどのような支援が必要かを検討し、ケアプログラムを作成することを考えた。

その基礎資料を得るために、医療従事者へのアンケートを実施し、思春期の二分脊椎女性の月経と性に関して医療従事者のケアの実態を明らかにすることを研究目的とした。

II. 対象および方法

1. 調査方法

郵送法による無記名自己記入式質問紙調査

2. 調査対象

二分脊椎研究会会員 269 名を対象とした。

3. 調査期間

平成 20 年 1 月～ 2 月

4. 調査項目

- 1) 基本属性
- 2) 月経に関する相談経験の有無とその内容、教育支援の経験と内容、必要性
- 3) 性に関する相談の経験とその内容、教育支援の経験とその内容、必要性

1) 川崎市立看護短期大学

2) 岐阜大学医学部看護学科

4) 月経や性の健康教育に関する考え

5. 分析方法

数量化したデータは統計ソフトSPSS Ver17.0を用いて統計処理を行い、記述部分は内容を質的に分析した。

6. 倫理的配慮

本研究は岐阜大学医学系研究科医学研究等倫理審査委員会の承認を得て実施した。調査票の発送は、二分脊椎研究会事務局が行い、研究の主旨、および研究協力が任意であることを明記し、調査票の回収を持って同意とみなした。

III. 結果

アンケート回収数は92(回収率34.2%)であった。

1. 対象の基本的属性

医師82名(89.1%)、看護師4名(4.3%)、PT/OT4名(4.3%)、その他2名(2.3%)で医師からの回答が最も多かった(図1)。医師の内訳は泌尿器科医26名(31.7%)、脳外科医22名(26.8%)、整形外科医19名(23.2%)、小児科医5名(6.1%)、小児外科医3名(3.6%)、産科医1名(1.2%)、その他6名(7.2%)であった。年代別では、30代6名、40代32名、50代42名、60代11名、不明1名であった。性別は男性76名(82.6%)、女性16名(17.4%)であった。経験年数は最も短くて3年、最長で36年、平均17.8年であった(図2)。

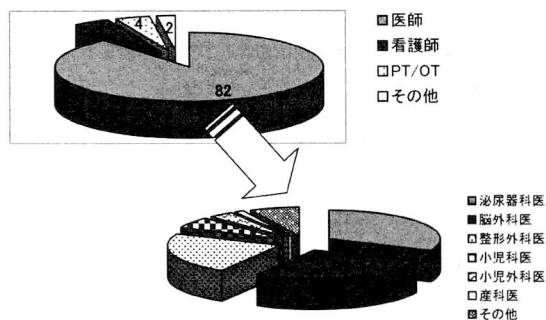


図1 基本的属性

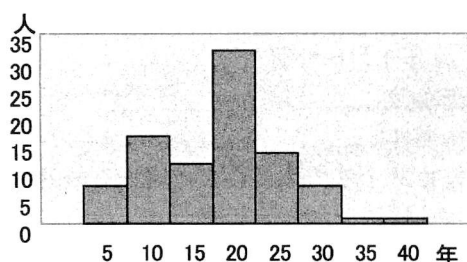


図2 経験年数

2. 月経に関する相談の有無とその内容

月経に関する相談を受けた経験の有無では、あり20名(22.0%)、なし72名(78.0%)であった。相談者の年齢は8歳から30歳であり、本人だけでなく母親からの相談も数件見られていた。相談内容では、月経不順(治療薬、二分脊椎との関係)7件、月経時の自己導尿の対処法8件、その他4件であった。その他の内容では早発月経や月経の遅れなどであった(表1)。

相談内容	件数
月経時の対処法(自己導尿など)	8
月経不順	7
月経、妊娠、出産の知識提供	5
月経時の尿路感染のリスク	2
その他	4

その他
 ・手術時不妊手術を依頼された
 ・初経の遅れで相談
 ・早発月経
 ・初経を遅らせてほしい

3. 月経に関する教育支援の経験とその必要性

月経に関する教育支援の経験は、回答があったのは8名(9.9%)で、その内訳は医師4名、看護師4名であった。支援の内容では「月経についての一般的な話」、「月経の知識」、「自己管理方法」、「月経開始時の排泄障害の対応」、「月経時の自己導尿の対処法」などであった(表2)。支援の方法で具体的に回答があったのは看護師で、「月経の知識や自己管理の方法」についてパンフレットを用いて説明を実施したり、「排泄障害の対応」については適宜実施しながら指導をしていた。教育支援の経験なしは83名(90.1%)であった。教育支援の経験なしと回答した人に支援の必要性を聞いたところ48名(58.6%)が必要性ありと回答していた。その内容は、「月経があり妊娠が可能であることを話すことが必要である」、「排泄管理と同レベルの月経の衛生管理が必要である」等があげられていた。

表2 月経に関する支援内容

支援内容
月経についての一般的な話
月経の知識・自己管理
月経開始時の排泄障害の対応
月経時の自己導尿の対処法

4. 性に関する相談の経験の有無と相談内容

性に関する相談の経験では、16名(17.4%)が経験ありと回答しており、経験のないものは74名(80.4%)、無回答2名(2.2%)であった。相談を受けた年齢は17歳から30歳代で20代が最も多く、相談内容は、「性交時の尿漏れ、尿路感染、不感症」、「妊娠の可能性」、「妊娠管理上の問題」、「出産」などであった(表3)。

表3 性に関する相談内容 (複数回答)

相談内容	件数
性交について(尿漏れ、尿路感染、不感症)	9
妊娠について(可能性、管理上の問題)	7
出産について	3
異性との交際について	2

5. 性に関する教育・支援の経験の有無とその必要性

性に関する教育支援の経験では、15名(16.5%)が経験ありと回答しており、経験のないものは74名(81.3%)であった。支援の内容では「性交時の尿漏れの対処法」、「妊娠の機序の説明」、「人間として女性として生きるサポート」、「妊娠・出産の例はかなりあることを話し、ポジティブに考えてもらう」などであった(表4)。

表4 性に関する支援の内容

支援内容
性交中の尿漏れの対処法
妊娠の機序
人間として女性として生きるサポート
異性を好きになること
障害のレベルに応じたその子にとって可能な性

性に関する教育支援の経験がないと回答した人に、性に関する教育支援の必要性を聞いたところ、42名(54.5%)が支援の必要性があると回答していた。他には「聞かれれば答えるが支援するだけの知識や経験がない」、「健常者と同じでよい」、「現状がわからないので必要性もわからない」などであった。

6. 月経や性の健康教育についての考え方

月経や性の健康教育について、いつ、誰が、どのような方法で行うのが適切と考えるかの問いに対して85名(92.3%)が回答していた。誰が行うと良いかでは、二分脊椎の知識が豊富な女性職員(医師、看護師、臨床心理士)、産婦人科医師、専門のコーディネーター、先輩の患者、保護者などであった。健康教育を行う時期としては、幼少期、小学校入学前、10歳から15歳などであった。適切な場所としては、医療機関では二分脊椎外来、医療機関以外では患者

会、学校、家庭などが挙げられていた。方法では、個別相談が最も多く、他に母子ともに行う、ピアカウンセリングなどが挙げられていた(表5)。

表5 月経や性の健康教育のあり方

担当者	女性職員
	看護師
	担当医 専門のコーディネーター
時期	思春期
	初経前後
	幼少期から(排泄ケアといっしょに) 高校卒業後(性に関すること)
場所	二分脊椎外来
	学校
	専門病院 二分脊椎の会
方法	個別指導
	ピアカウンセリング 母親と一緒に

IV. 考察

今回の調査結果から、月経や性の健康に関する相談・支援の経験は少ないが、必要性の認識は高く、その具体的方略についての知識や情報が少ないことが明らかになった。

月経の相談を受けた経験ありと回答のあったものは約2割で、性に関する相談を受けた経験はより少なく2割弱であった。相談経験が少なかった理由としては、対象となった医療関係者は男性が約8割と多かったことがあると考える。月経の指導は母親や同性の教師など、同性から受けることが通常であり、月経や性に関する相談は同性にすることがほとんどであることから考えると、異性の医療従事者には相談しにくい内容だと言える。

月経に関する相談では、母親からの相談も数件みられていた。月経時の自己導尿の対処や月経不順に関して母親自身の経験からは理解できず適切な指導をすることが難しいため、医療従事者への相談になったものとする。

月経の教育支援の経験では、ありと回答のあったものが約1割と少なかった。これは道木の二分脊椎女性を対象としたアンケート調査⁶⁾で、医師、看護師からの指導を受けた経験は約1割と答えており、一致する結果であった。

教育支援を行った職種は医師と看護師であり、看護師は回答のあった4名全員が行っていた。看護師の支援内容をみると、月経の知識や自己管理につい

て、月経時の自己導尿の対処法も含めて初経前から思春期後半まで適宜指導をしていた。看護師は二分脊椎児の成長過程をふまえて、その成長段階にあった支援を行っていると言える。

月経についての相談・支援の経験のない人に教育支援の必要性を聞いた結果では、約6割が必要ありと回答しており、相談の経験や教育支援の経験は少ないが必要性の認識は高いことが推察された。

しかし、必要性はあると考えるが具体的方法がわからないと回答した人もみられた。その理由としては、今回対象となった医療関係者は、産科医は1名と少なく、泌尿器科や整形外科、小児外科の医師が多かったことが挙げられる。月経については専門外であり、しかも異性であることから、具体的方略についての知識や情報が少ないことが伺える。

月経教育は、通常は学校もしくは家庭で母親から行われることが多い。しかし、二分脊椎女性の場合、膀胱直腸障害により、自己導尿や摘便などの自己管理が必要となるため、通常の月経指導では適切とはいえない。二分脊椎の疾患、治療、自己管理内容などをふまえて行う必要があるため、医療従事者がその一端を担うことが必要と考える。

また、月経教育は、月経の意義を知り、女性性を肯定的に受け止めるために大切なものである。特に初経をどのように受け止めるかは、女性の自己認識に影響を与えるため、月経の意味について教えておくことが大切である⁷⁾。

川瀬⁸⁾は「初経を肯定的に受け止めたものは女性としての喜びを感じ母性としてのアイデンティティを確立できるが、否定的に捉えたものは母性としての自分を否定しやすくなる」と述べている。幼少期から排泄障害を持ちながら成長する二分脊椎児は自己の性を否定的に捉えやすく、自己肯定感への影響も考えられる。道木の二分脊椎女性の月経に関する研究⁹⁾では、初経を否定的に受け止めた人は約半数であった。

二分脊椎女性は膀胱直腸障害があることから自己導尿や摘便を行っていることが多く、それだけでも精一杯ななか、月経血の対処はわずらわしく思うものである。また、母親にとっては娘の養育で精神的な余裕がないため、娘の月経を祝う気持ちが持てないこともある¹⁰⁾。二分脊椎女性の健全な月経と性の健康を促進するためには、本人および母親への支援が必要になると考える。

性についての相談は、2割弱であり、月経の相談

よりも少なかった。教育・支援の経験も同様で少なく、2割弱であった。相談が少なかった理由としては、月経の相談同様、対象者が男性の医師が多かったことが考えられる。性についての相談は月経よりもより繊細であり、異性には相談しにくい内容と考える。

今回の調査で性の相談や支援の経験がない人に教育・支援の必要性を聞いた結果は約5割が必要と回答していた。しかし、「必要性はあると思うが、男性は関わりにくいので同性がおこなうのがよい」という意見や、「聞かれれば答えるが支援するだけの知識や経験がない」とあったように、必要性を感じても実際に支援までいかない理由も推察された。

性についての相談内容では、「性交が可能か」「妊娠の可能性」など女性の二分脊椎の場合は卵巣・子宮の機能はホルモン環境によって問題ないといわれていることについても相談されていた。これは、一般的に性についての情報は母親よりも友人やインターネット、雑誌などで得る機会が多くなると考えられるが、二分脊椎の性については情報を得られる範囲が限られてくることもあり、医療関係者に相談したのではないかと考える。

また、相談内容に「性交時の尿漏れ」や「尿路感染の危険」など二分脊椎による排泄障害から起こる問題についてあげられていた。二分脊椎女性が性を否定的に捉えることなく、健全に向き合い対処ができるようにするためには、性に対する情報提供を医療の現場でも工夫していく必要があると考える。

月経や性の教育をいつ誰がどのような方法で行うのが良いか、ということについて9割以上の人が考えていた。これは今回の対象者が二分脊椎研究会会員であったため、二分脊椎に対して理解ある医療従事者が多かったことが考えられる。また、経験年数も長いことから乳幼児期から継続的に関わっており、二分脊椎児の成長過程をとらえた関わりができていたため、思春期以降の二分脊椎女性への支援として月経や性の支援の必要性が考えられたものと推察する。

また、病院で月経や性の健康教育を行う場合の診療科はどこがよいかについての回答では、二分脊椎外来など専門外来で行うのがよいと考えている人が多かった。担当者は月経や性についての知識がある産科医師や専門看護師が行うのがよいという考えが多かった。専門的知識をもった医療従事者の継続的な関わりが示唆された。

二分脊椎は泌尿器科、脳外科、整形外科など複数の診療科に受診する必要がある。複数の科を一度に受診できるよう窓口をひとつにし、専門看護師やソーシャルワーカーなども関わる二分脊椎外来が導入されつつあるが、全国で二分脊椎外来があるのは数病院のみである¹¹⁾。今回対象となった医療従事者は二分脊椎について理解のある人が多かったが、地域によっては二分脊椎を診ることができる病院がない場合もある。医療従事者が病院内で行う教育・支援のみでなく、二分脊椎協会の支部など病院以外での教育・支援も考える必要がある。

今回の調査から、月経や性の健康に関する相談・支援の経験は少ないが、必要性の認識は高く、その具体的方略についての知識、情報も少ないことが明らかになった。また、専門的知識を持った医療従事者の継続的関わりの必要性が示唆された。

今後は、二分脊椎女性の月経と性の健康を支援するための包括的ケアプログラム作成にむけて、その方略を具体的に検討していきたい。

V. 結論

1. 月経や性の健康に関する相談・支援の経験は少ないが、必要性の認識は高く、その具体的方略についての知識や情報が少ないことが明らかになった。
2. 専門的知識をもった医療従事者の継続的関わりが示唆された。
3. 病院内だけでなく、二分脊椎協会など病院外での教育・支援の場を考える必要がある。

おわりに

本研究にご協力いただいた二分脊椎研究会会員の皆様に深く感謝いたします。

この研究は、平成19年度科学研究費補助金（基盤研究(C) 研究代表者野田洋子）「二分脊椎症女性の月経と性の健康に関する包括的ケアプログラムの開発」の研究の一部であり、平成20年7月「日本二分脊椎研究会」で発表したものをまとめたものである。

引用・参考文献

- 1) 吉田一成. 二分脊椎症. 運動障害のリハビリテーション. 南江堂, 2002, p.141-146.
- 2) 石堂哲郎他. 成人二分脊椎の性機能. 総合リハビリテーション, Vol.20, 1992, p.107-110.
- 3) 平山暁秀他. 二分脊椎症における性機能の検討. 泌尿紀要. Vol.41, 1995, p.985-989.
- 4) 百瀬均他. 泌尿器領域における今日的諸問題; 性機能障害とその対策. 排尿障害プラクティス. 6, 1998, p.293-299.
- 5) 西井久枝他. 思春期以降まで経過観察した二分脊椎症例の問題点. 西日泌尿. Vol.64, 2002, p.635-638.
- 6) 道木恭子, 岩谷力. 二分脊椎女性の月経に関する調査研究. 小児看護. Vol.31,no.2, 2008, p.264-268.
- 7) 川瀬良美. 月経の研究; 女性心理学の立場から. 川島書店. 2006, p.9-29.
- 8) 前掲7)
- 9) 前掲6)
- 10) 井上美園. 障害のある人をめぐるバリア. 医学と教育. Vol.48, no.12, 2000, p.1113-1119.
- 11) 鈴木信行. “二分脊椎用語の解説”.
< <http://www.asahi-net.or.jp/~wc4n-szk/index.htm> > (参考 2009-11-01).
- 12) 田中克幸, 他. 二分脊椎者の性機能障害. MB Med Reha. no.53, 2005, p.11-16.
- 13) 林恵子. 二分脊椎のライフサポート. 文光堂. 2001, p.2-19.
- 14) 石堂哲郎著. 二分脊椎のライフサポート. 文光堂. 2001, p.72-95.
- 15) 石堂哲郎. 二分脊椎者の性機能・結婚の問題. 医学のあゆみ, 192(4), 2000, p.296-297.
- 16) 田中克幸, 他. 成人に達した二分脊椎症例の性の問題点. 小児外科. Vol.34, no.8, 2002, p.944-949.
- 17) 山本良典. 障害者の性. ペリネイタルケア. Vol.17(s), 1998, p.206-210.
- 18) 友久久雄. 障害者と思春期. 産婦人科治療. Vol.84, no2, 2002, p.155-158.
- 19) 野田洋子. 女性と月経. 女性の看護学. メジカルフレンド社, 2000, p.186-198.
- 20) 工藤美子. ライフサイクルからみた女性の健康. 女性の看護学. メジカルフレンド社, 2000, p.145-159.